

# 私の体験した

## 半世紀前の日本とアメリカの保育

亀高 京子

### 幼稚園の先生になって

終戦直後に卒業して最初に勤めたのは母校の附属幼稚園だった。級友の殆どが高等女学校から学制改革による新制高校勤務だったから、少々とまどいはしたが嬉しかった。

私のお話に目を輝かせる子ども達。女の子のお気に

入りは七匹の仔山羊と赤頭巾ちゃん、狼の声色に“コワイ”と言いながらも繰返し希望する。男の子は私の創作“ケンちゃんの冒険”に歓声をあげてくれた。小さい時からサボッてばかりいたピアノも、歌の伴奏は何とか弾けたが、不得意のお絵かきは上手な保育実習生に全面的にお願いした。

“ありさんとありさんがこっつんこ”の歌がリスさん

から象さん、○ちゃんと△ちゃんと拡がって大はしゃぎだった。

お庭で蟻の観察に夢中の二人、「ほら、こつちにも穴があるよ」「小さい方はお勝手口なのよ」「そうか、そいじゃこつちがお玄関だね」と納得の笑顔。

幼稚園のお山に先生達で馬鈴薯を植えていた。その一つを植木鉢に埋めてお部屋におき、「芽が出て大きくなったら土の中にお薯が出来るのよ」と言ったが、まだかまだか？ と毎日のように誰かがそつと掘ってみるので育たない。家で植えて芽の出たのを月曜日の朝早く交換しておいた。みんな大喜びで見守り、夏休みの前日に収穫できた三粒は貴重品だった。

少し離れたところで「昨日ね、お月様が僕と一緒に歩いたんだよ」の声、思わず耳をそばだてたら、「ちがうもん、僕達の方に来たんだよ、ね」と、同じアパートの二人組が優勢だ。その時、中学生のお兄さんがいる物知り博士の宏ちゃんが「どっちもいいんだ

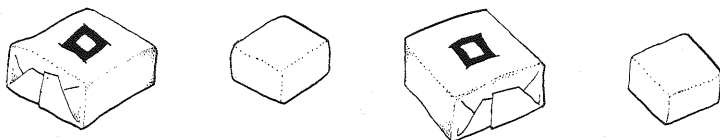
よ。そのわけはね、難しいから中学生になつたら解るよ」の裁定に何となく収まった。宏ちゃんは経験ずみだったようだ。私は稔まじを二つ使つて説明しようかとも考えたが、昔の自分と重ねて、そつとしておきたかつた。

毎日、自分の子ども時代が再現されてるようだったし、子どもの個性に目を開かされた。

子どもと同じ視点でと、しゃがんで植物を観察することや、健康状態の把握も学んだ。

新米の私を信頼しての内緒話や「僕のおよめさんになってネ」と懇願されたりもした。

教職生活最初の担任だった林の組



の三十八名は、ほんとうに可愛かった。ひとりひとりの『くせ』まではつきりと覚えている。

子ども達の成長とともに私も大きく成長させていた。感謝でいっぱいである。

### アメリカのナースリースクールで

一九五七年、夫がカルフォルニア大学デビス校に研究留学することになり、三歳になったばかりの長女を連れて同行した。

夫の師であるドクター・クライバーの夫人のメアリーが、私の履歴書を見て、一年間の滞在に最適と思える二つの案を示してくれた。

その一つが、夫人（元家政学部児童学科教授）の発案で設立されたナースリースクールへの母子ともの参加である。先生一人と助手、家政学部、保健学部出身の母親達との共同保育である。子どもは月々金の毎

日、母親は一ヶ月に一週間、六人のグループで三十六名の三、四歳児の保育にあたる。隔週水曜日の夜に先生と母親全員でミーティングを持つ。

父親も一ヶ月に一回の土曜日に園舎の補修・庭の整備の役割というシステムである。

保育の基本は、十年前に勤めていた附属幼稚園と共通していて懐かしかった。手を洗うこととサンキューの躰以外は大らかである。

十時に、牛乳、オレンジジュース、水とクラッカーが用意されるが、ひとりひとりに何を選ぶかを言わせ、配ってくれる人へのサンキューを忘れると注意される。シャイで泣き虫だったまち子も二週目には慣れて、ミウク（牛乳）、ワラー（水）、オレンジジュース、サンキューと、ハイ（お早よう）、バイ（さよなら）だけで、支障なく参加できた。

お絵書きは、一人前の画家のように画架にかけたカンバス（紙を張って）に、筆と水彩絵具で自由に描か

せる。その時、衿をはずし袖を短く切った大人の古ワイシャツを後前に着せて、後を洗濯バサミで留める。在籍、卒園児の親が洗濯した古ワイシャツを大籠に入れてくれるから山のようにあった。

お砂場では、様々の型につめて抜いていた子どもが、まち子が両手でつくるお団子を真似すると、僕も私もと次々に熱中した。

金髪の子はそれほど多くなく、茶色、灰色、黄色の中で、まち子の黒髪は目立っていた。

子どもの適応力は強い。私の英会話は一向に上達しないのに、半年もすると、まち子は友達との会話に不自由しない。子ども達は何の違和感もなく、マチーコと呼んで仲良しだ。子どもに国境は無いことを痛感・確認した。

メアリーの提案は大成功だった。子どもを通して家族ぐるみの交際の輪が拡がり、ピクニック、会食、レシピの交換など国際交流へと進展した。いずれも堅実

で家庭生活を大切にしている人達だった。アメリカの生活様式は、新環境との相互作用の中で、ヨーロッパ各民族の既成文化を容れさせたが、それでも各家庭には祖父母の出身地の家政理念が生活慣習・家庭教育に片鱗を残していた。

私共の経験は、大学町という特殊性、四十余年前の良き時代のアメリカだったからかも知れない。広大なアメリカの中の豊かな自然環境と良識ある人々で構成する学園町(市)！ たった一年余の生活だったが楽しく有意義だった思い出は盡きない。

(元東京家政学院大学)

